

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成20年8月1日

財団法人京都大学教育研究振興財団  
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科     アジア・アフリカ地域研究研究科

職 名・学 年           一貫制博士課程・5年

氏           名           佐 藤 靖 明

事 業 区 分	平成20年度・国際研究集会派遣助成			
研 究 集 会 名	第11回国際民族生物学会			
発 表 題 目	ウガンダ中部ガンダ社会におけるバナナに関する認識様式 The Modes in Recognition of Banana Plants among the Baganda, Central Uganda			
開 催 場 所	ペルー、クスコ			
渡 航 期 間	平成20年6月22日    ~    平成20年7月6日			
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料    無    有( )			
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	250,000	円	
	使用した助成金額	250,000	円	
	返納すべき助成金額	0	円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	国際線航空費(関空 リマ往復)	127,000円	
		燃油サーチャージ	46,200円	
		ペルー国内線航空費(リマ クスコ往復)	32,000円	
学会参加登録料		18,200円		
	宿泊料(11泊)	26,600円		

## 平成 20 年度国際研究集会派遣 成果の概要

研究集会名	第 11 回国際民族生物学会
開催場所	ペルー、クスコ
渡航期間	平成 20 年 6 月 22 日～平成 20 年 7 月 6 日
派遣・報告者	佐藤靖明（大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程）

報告者は 2008 年 6 月 25 日から 30 日まで、ペルーのクスコで開催された第 11 回国際民族生物学会（11th International Congress of Ethnobiology）に参加し、研究発表をおこなった。

国際民族生物学会（International Society of Ethnobiology）は、人間社会と生物の関係にかかわる境界的な学問領域を広く含み、1988 年に第 1 回が開かれた新しい学会である。世界中の研究者が集う 2 年に一度の大会には、研究発表とともに、研究者とローカルな人々との活動の中から生まれてくる成果・問題・可能性についての情報交換や研究に関する倫理規定づくりがおこなわれる。

大会は、テーマごとに以下の 5 つのセッションが設けられた。1．伝統的農耕景観とコミュニティによる保全地域。2．先住民・気候変動・適応。3．民族生物学と伝統的資源に対する権利。4．生物 文化的多様性を強化するための知識。5．民族生物学の進展。合計で約 130 の口頭発表があったが、それと並行して、100 を越えるポスター発表やテーマ別フォーラム、スタディツアー、民族音楽の演奏会などもおこなわれ、内容盛りだくさんであった。開催期間をとおして、とくにアフリカ各国とメキシコの研究者と出会い、互いの国の研究事情を伝えあい、民族植物学に関する見解を交わすことができた。

報告者は、セッション 5 につくられた分科会 "African Livelihood Systems, Their Modes of Ethnobiological Cognition and Contribution to Nutrition, Health and Ecological Sustainability" の研究発表者として参加した。これは、京都大学と Bioversity International（生物多様性の保全と人間生活の維持の両立を目的とした国際研究機関で、2006 年に国際遺伝資源研究所（IPGRI）から改名）の合同企画である。日本、イタリア、ケニア、ベニンからの 12 人が民俗知識・健康（栄養）・生態といったキーワードに関連させて、フィールド研究の成果が披露された。とくに、日本人の各発表をとおして、京都大学を中心とするフィールドワークの長所がアピールされた。報告者は、分科会での各発表内容を勉強会で事前に検討したり、独自にプログラム・要旨集を作成・印刷して聴衆に配布するなど、準備段階からこの分科会にかかわり、会の運営に関する経験も積ませていただいた。

報告者は、「ウガンダ中部ガンダ社会におけるバナナに関する認識様式」（"The Modes in Recognition of Banana Plants among the Baganda, Central Uganda"）という題で発表をおこなった。アフリカの比較的湿潤な地域、とくに東アフリカ内陸部の大湖地方には、バナナを主食とし、バナナ農耕を生業基盤とする地域が広く分布している。その中でも中部ウガンダ・ガンダの人びとは、とくにバナナと強い文化的な結び付きをもつことで知られる。人びと

の植物をめぐる認識の一面的・固定的なとらえ方を乗り越えることと、地域で広く共有する認識と狭い範囲にとどまる認識の二つをうまく整理することを目指し、現地での事例から見出された4つの認識パターンを指摘しながら、バナナに対する豊かな民俗知識をかれら自身の生活や経験に位置づけて説明した。会全体での議論では、多くの研究・開発活動において、報告者の指摘したような女性の認識能力の高さについてもっと配慮すべきとの指摘が座長からなされた。近年、アフリカでは作物生産と栄養を絡めた開発活動、バナナの繊維加工の産業化が進められつつあると聞くが、それらの大きな流れの中で、地域の人びとがどのように植物に対する独特の感覚をつくりあげ、実際の生活に反映させていくのかは、盲点となりやすい。今の時代だからこそ、地域に寄り添い、人びとを深く知ろうとするフィールド研究者の繊細な感覚は、ますますオリジナリティーを帯びてくる。このことを、分科会において実感することができた。

6月27日には、ペルー郊外へのスタディーツアーが催された。報告者は「ジャガイモ公園 (Potato Park)」へのツアーに参加した。ペルーはジャガイモの栽培起源地であり、その最も豊富な遺伝資源が人びとの生活をとおして維持されてきた。しかし、近年の社会的状況は、その持続を困難なものにしている。政府と国際機関の援助を受けたジャガイモ公園では、住民自身が農業をおこないつつ、ジャガイモの品種多様性の価値を積極的にコミュニティの外にアピールする活動を観察することができた。このアイディアは、アフリカにおける作物の遺伝資源保全にあてはめて考えることも可能であり、今後関係者と知見を共有していきたいと考えている。